

## 小川 東吾 先生のこと

二七回生

林 裕三

東京へ単身赴任で上京してもう二年と少しになるが約四十年前、私は学校を卒業して千里山を離れ、直ぐ中堅電機会社に就職し、そのまま三重県の伊勢市に住みついた。

今から十五年ほど前、伊勢市での祭りの日に、一眼レフを肩にかけられた、千二から一中の先生であった小川東吾先生に良く似た人が、祭りの人混みの中に歩いておられた。「あつ、ロングだ！」と思つたが見失つてしまった。そう、あの特徴ある長い顎をお持ちの小川先生のことを我々は、彼が英語の先生でもあったので、「ロング、ロング、アゴー」から親しみを込めて「ロング」と渾名した。しかし、「何故、大阪千里山の英語の先生が伊勢におられるのか」「他人の空似？」

「伊勢におられるご兄弟？」「それにしても似過ぎる」「親戚が伊勢におられ、祭りで遊びにこられた？」などなど色々空想していたが、そのまま時が過ぎた。

しかし、それから五年ほど経って、大阪の千里山に帰って、小学校の恩師である東谷睦子先生を訪ねた時に、ご主人である東谷先生が「君が住んでいる伊勢市に小川先生がおられ、最近、『イギリスの子供たち』と言う写真集を出された。君の住所の近くではないか。これがそうだ。」と本を見せて下さった。写真集の巻末に記載があった先生のご住所は、私の住所の隣町。『他人の空似』ではなかったのである。その後直ぐに、先生の伊勢市のご住所を訪ねたのは言うまでもない。

小学校の高学年になって判ったことだが、小学校入学式の写真に詰襟の学生服を着ておられた先生がおられた。それが小川先生である。お話によると、先生は笑いながら背広を買う余裕がなかったと言っておられたが、あの時代は皆そうだったかもしれない。

しかし、私が卒業する時には既におられなかったが、なんと吹田一中に入学すると、また、おられた。

私は先生の授業も受けていないし、担当学年も違うこともあって、先生とそんなに深い繋がりがあつたわけではない。ただ、大阪の千里山と言う半径一・五kmも満たない小さな街に住んでいた先生と生徒が、ま

た二人とも、この小さな伊勢市の街に住むようになった不思議な縁は、どうしても書きたいテーマであつた。昨年の夏、小川先生と関係のある伊勢のサークルから原稿依頼があり、その原稿を修正追記し、拙い文章であるが、小川先生のお宅にお邪魔して聞いた話と私の思い出を絡ませながら先生のお話をする。

小川先生は昭和四年に三重県志摩郡波切町でお生まれになり、教員不足の時代でもあつて、なんと十六歳の時に、三重県波切小学校で代用教員に、一年後には検定試験を受け、正式教員になられた。その後、大阪に出て行かれ、昭和二四年十九歳の時に大阪吹田の千里第二小学校の先生になられた。

そのときに直ぐに五年生を受け持たれ、二十歳の時にそのまま六年生を担任されたのである。先生は思い出して語られる。「私は忘れません。文集に女の子が『六年生になつても担任は小川先生よ』と報告すると、お母さんが『良かったね』とおっしゃいました』と書いてくれた。こちらは十九歳の少年ですよ。あの頃の大阪の千里山の親御さん方の懐の深さ、度量の大きさには感謝しきれない。』

小学校の木岡翁吉校長先生の勧めもあつて、大学の専門部(夜学)で英語の勉強をされた。従つて、私が昭和二五年に、小学校に入学すると詰襟の学生服を着ておられたのである。昭和二六年春六年生を送り出した後、四月には今度は経験だと言うことで一年生の担任を任された。

ところが同じ街の吹田一中において英語の先生が突然辞められ、英語が出来る小学校の小川先生に直ぐに来てほしいと言うことになったようである。かわいい子供たちに取り囲まれて「行つたらいいや。行つたらいいや。」と言われ、目頭が熱くなつて、先生も相当困られたとのことである。

昭和二六年九月講和条約を締結した日(何故か先生はこのように言われる。余程思いがあつたのだろう。)に、吹田市立第一中学校(吹田一中、あるいは単に一中と言う)に赴任された。一中においても水鳥喜平校長先生の勧めもあつて、一中から一・五km程の大学院で英語を勉強された。昭和三〇年から三三年のことである。

私が一中に入学したのが昭和三一年、先生は非常に

怖いと言う印象であった。体育の先生は通常、生徒指導も担当されて、うるさく言われるが、他の学科の先生は、担任の生徒以外は見ぬ振りされていることが多い。ところが小川先生は違った。お若いこともあってか大きな声で叱り通してあった記憶である。

私自身も「廊下を走るな」と叱られたことがあった。勿論英語の授業は厳しく、私は一度も教えていただけなかったのが、残念でならない。先生に教えていたのだら少しはマシになっていたと思うのである。

先生は授業の他に放送部と登山部を担当されていた。私も登山部に入れていただき、毎年夏になると兵庫県武庫川武田尾のキャンピングサイトにつれて頂いた。テントを張って、キャンプファイヤ、山の歌なども教えていただいた。特にあの武田尾の狭い谷間から見える星を見上げながら歌った『レッド・リバーバリー』は今でも武田尾を思い出させる。「谷間」のところを「武田尾」と替えて歌った。

また、日曜日には六甲のロックガーデンに連れて行っていた。引率の先生の中で小川先生が一番若かったから、いつもザイルを肩に掛けさっそうと歩い

て おられたのを思い出す。

チムニー登攀（煙突のように七〇cm程度あいた垂直の岩の間をザイルなしで素手と足のみにて登っていくこと。単にチムニーと言う人もいる）や、アップザイレン（二〇から二〇mの崖をザイル一本で懸垂下降をする。今の消防レスキュー隊のように金具は付けていない。）を何回も教えていただいた。別の安全ザイルもつけていなかった。私はチムニーに関して下さえ見なければ、いくらでも登ることが出来た。アップザイレンは初めの空中に仰向け反る時のみが怖いだけで後はどーってことは無かったが、先生のお話では私の三年生の時、担任となる大西庄六先生は怖がって辞退されたとのことである。しかし、後の話しになるが、私が高校二年生のとき、後輩の一年生を校舎の非常階段で、このアップザイレンを教えたことがあり、見ている方が怖いことを知った。中学生の私達を教えられた先生方のお気持ちは如何であつたらうか。先生は振り返って言われる。「生徒が落ちてくるようであれば引率の先生が皆で体を組み合わせて、食い止める覚悟であった。」と。そこでも「千里山の風土、親達の先生を信用された度量が大きかった」と回顧される。千里山は

サラリーマンが多い住宅地であつたので、子供は親から放置され、先生に任せざるを得なかつたのではないかと私は思うが、先生方がいつも授業以外のことも面倒を見てくださっていた。

確かに一中は校外活動が多かつたと思う。そのころ、大阪梅田にアサヒアリーナというスケートリンクはあつたが、そこにも一年に一回はつれて行って下さつた。また、超大型映画「シネラマ」やデイズニーのアニメ映画「ジャンボ」「ピーターパン」それに記録映画「砂漠は生きている」などなど毎年二、三回は行っていたし、社会見学部？では、日曜日、お寺など名所旧跡巡り、このときのガイドは校長先生の独壇場であつた。夏休みには四日間くらいの旅行があつた。従つて、毎年夏には、私は登山部でキャンプに行き、社会見学部で旅行もつれて行つていただいたことになる。この社会見学部の旅行は中学卒業後も参加させていただいた。

小川先生の話の戻ると、登山部の他に放送部を担当されていて、昨年、東京で同期の集まりがあつたとき小川先生の話をする、ある女の子（と言つても六十

余歳）が「私が人前で話が出来ようになったのは、放送部で教えていただいた小川先生のお蔭。本当に感謝している。」と話してくれた。また、違う女の子が「一中の応援歌知らない？」そう言えは

『ズン』の『ズ』の字は『一中』の『ズ』の字何時も意気あり我が選手

ゴール目指してまっしぐら それー

『ズ』の字一番、『一中生』  
と言う歌があつた。それが小川先生の作詞だと言うことだけでなく、連合体育大会などには応援団長も務めておられたのである。私の知らないところで小川先生は色んな活動をされていることを知った。

「一中・千二共に大阪府でも優れた学校でしたから、生徒の未来への応援歌の想も重ねたのです。」と思ひ出して語られる。

私は中学を昭和三四年に卒業しているが、小川先生は校長先生や大学の恩師山本忠雄先生のご推薦もありワシントン大学『シアトル』への留学試験に挑戦された。試験もパスされ、奨学金ももらわれたのであるが、お体（腎臓）を悪くされ、健康のためやむなく留学を

あきらめられ、風土の良い伊勢市に住居を構えられた。

昭和四一年三重県立鳥羽高校、四四年から六二まで三重県立宇治山田高校の英語の先生を勤められた。このころ、受験英語で非常に厳しい先生であったと後年門外漢である私の耳にも入って来ている。私が大学を卒業し、神鋼電機に入社、伊勢市に来たのは昭和四二年。従って、伊勢市に来たのは先生の方が早い。

先生はお考えがあつて、昭和六二年、五七歳の時退職され、一年間かけ夏目漱石全集を読破し、その後、イギリスで半年間、見聞を広められた。その成果が私と小川先生との不思議な再会のきっかけとなった先の『イギリスの子供たち』としてまとめられた写真集である。他に、先生はニュージールランドも遊学された。そのお話は後年、伊勢のサークルで講演された記憶がある。このように記述してくると色々思い出され、私が講演前に先生のご紹介を兼ねてプレスピーチさせていただいたのではないか。それよりも「小川先生が私の出身大阪の小学校、中学校の先生だ」と言うことを伊勢の人に言いたかつたことで、相当興奮していた。

その後、鳥羽商船高等専門学校の先生のお誘いもあつて、その鳥羽商船高専で英語を六年間教えられ、平成七年、六五歳のとき退職された。しかし、その後もお友達の英語の先生が短期留学、旅行などされる場合、代わりに教えに行かれたこともしばしばあったとのことである。また、先生は述懐して「イギリスやニュージールランドで学んだ結果、鳥羽商船時代と宇治山田高校（山高）時代とは教え方が随分変りましたね。山高時代の生徒たちがその差をビックリするそうです。子供たちの自主性をもっと重んじるべきであつたのに！」とのこと。

さらに「振り返ってみると、自分は本当に幸せだったと思います。私は実は十五歳の時なくなっているのです。戦争が終わった年の十二月、兄と二人で小舟に乗り、地元波切の海へ出ると、急に天候があれ、大波に翻弄され、水は舟に入ってくるわ、強い西風に吹かれ、舟はぐんぐん沖へ流されるわで、とうてい波切の港に帰れなくなつた。偶然近くに漁師がいたので、大声で助けを求めた、『今、鰯が釣れて来たのもつたいないから』と取り合ってくれなかつた。遅くなつて、

わたし達の様子がただ事でないと察した一人の漁師が、漁の網を放置して、助けに来てくださり、やつと夕刻、波切港に生きて帰れました。その後も、何かといろいろな方々に助けて戴いています。幸せなことですよ。」と。この命の恩人である漁師さんの家には、今でもお盆にはお供え物を贈り続けられているとのことである。昨年夏も、先生を訪ねて、同窓会を開催すると言つて、五十余年前、先生が教えられた現在七十歳前の大坂の生徒たちが、伊勢市まで来てくれたという。

小川先生はそう言う先生である。

（伊勢青年国際文化センター発行「WING II」から一部修正追記）

小川先生からの便り

千二・一中には、十年余り お世話になっていましたから、記憶に残して下さっている方も おられると思います。響感をかう事の多かつた日々でしたが、情熱を傾けた年齢でもありました。いい時代に、優れた学校で勤務出来た事を、有難くおもっています。

平成二十年六月二六日

小川東吾



最近のお姿  
(平成 20 年 6 月撮影)



千二時代の写真  
(昭和 25 年頃撮影)